

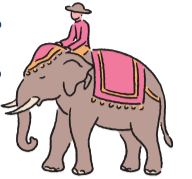
バンコクと八千代をつなぐ



▲勝田台小学校体育館で記念撮影。学校交流会を通じて、勝田台小学校の子どもたちも世界に目を向ける一日となりました



バンコクこども親善大使の交流



5月13日から20日まで、バンコクこども親善大使12人を含む訪問団一行が本市を訪れました。この国際交流事業は平成元年から始まり、これまでバンコク都から338人、本市から354人のこども親善大使がお互いの国を訪問しています。

訪問団一行は市公式行事のほか、本市滞在中にさまざまな日本文化を体験しました。

勝田台小学校の学校交流会や市内で日本の文化などを体験

今回の学校交流会の舞台は、勝田台小学校。体育館でのスポーツ大会や教室でのクラス交流を通じて日本の学校生活を、給食を通じて日本の食文化も体験しました。

午後には、勝田台小学校の児童が演技披露を行ったほか、民族衣装を着たバンコクこども親善大使が歌や踊りを披露しました。最後に勝田台小学校の児童とこども大使一行と一緒に「心に花を」を歌いました。

滞在中はこのほかにも、茶道連盟の皆さんの協力でお茶の作法を学び、バラが満開のやちよ京成バラ園を見学しました。

中央消防署を見学

世界一渋滞する都市と言われるバンコクでは、小型の消防車が多く、大型の消防車を見る機会が少ないと言われています。これを受け、中央消防署を訪問し、日頃から行われているレスキュー訓練の見学や大型消防車の乗車体験などを行いました。



救急車にも乗車体験しました

普段近くで見ることがない消防車を間近で見学し、こども親善大使は目を輝かせていました。

普段近くで見ることがない消防車を間近で見学し、こども親善大使は目を輝かせていました。

子どもたちの想いが形になったダイラックアンとテップウタイ

市では、毎年タイ王国バンコク都に八千代こども親善大使を派遣しています。海外では、子どもたちも常に日本人として見られていることを意識しなければなりません。子どもたちは出発前の事前研修では、自分たちの役割、

両国の文化の違いや、タイ語のあいさつなどを学んで準備します。

慣れない海外での表敬訪問や、学校交流会などの公式行事は緊張の連続です。しかし、多くの人々と出会い、ホストファミリーなどの優しさに触れることで、お互いを認め合うことの大切さに気づくきっかけとなります。

帰国してからもその気持ちが変わることはなく、平成16年4月に「バンコクの人たちに恩返しをしたい」「いつまでも交流を続けたい」という想いを持った有志が、OGOB会「ダイラックアン」を立ち上げました。



▲会場となった総合生涯学習プラザ。「ダイラックアン」は紙で両国の国旗を作り親善大使たちを迎えました

「ダイラックアン」は、タイで旅の安全や幸せを祈って手首に巻いてくれる白い糸のこと。自分たちが訪問したときに、心を込めて巻いてもらった感動が心に残っていることから、この名前が付けられました。バンコクこども親善大使も、「東の国よ永遠に」を意味する「テップウタイ」を結成しました。

今回の受け入れでは、ダイラックアン主催のウェルカムパーティーが総合生涯学習プラザで行われました。このパーティーは自分たちが訪問したときの経験から、こども親善大使の緊張を少しでもほぐせるようにと企画しているものです。ホストファミリーと一緒に参加し、子ども同士でゲームなどをしながら過ごします。当日は鬼ごっこや玉入れ、ドッ

ジボールなどの楽しいプログラムで、会場では大きな歓声が沸き起こりました。バンコクの子どもたちはリラックスした様子で、笑顔いっぱいの交流となりました。

絆の継承とバンコク訪問

こども親善大使を通じたこの国際交流事業が始まってから今年で38年目を迎え、バンコクと八千代の絆は次の世代へと受け継がれてきました。過去に八千代こども親善大使を経験した人の中には、現在もこの交流事業に携わる人がいるなど、互いの結びつきをより強固なものにしています。

これまで築き上げてきた絆を、絶やさず次の世代へと継承し、より強くしていくため、今後もこども親善大使を通じた交流に取り組んでいきます。

来年1月には、八千代こども親善大使12人がバンコクを訪問する予定です。今回も、異文化体験や、一生忘れられない大切な人たちの出会いなどを通じて視野を広げ、将来、国際社会で活躍してくれる新たな大使の誕生を期待しています。



▲5月14日、深井副市長を表敬訪問し、療養中の服部市長のお見舞いに千羽鶴を贈りました

お問い合わせは
シティプロモーション課
☎421-6703へ

広告

広告